

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

このことについて、6月の予察情報を送付します。

病虫害発生予報（6月）

令和8年5月29日
愛媛県

1 予報の概要

作物名	病虫害名	発生量	その他
水稲	いもち病（葉いもち） ウンカ類 イネミズゾウムシ	並～やや多 － やや少～並	今後の飛来注意
かんきつ	かいよう病 そうか病 黒点病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ	やや多～多 やや多～多 並～やや多 並 並	
かき	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ	並～やや多 やや多～多 並	
キウイフルーツ	かいよう病	並～やや多	
果樹共通	果樹カメムシ類	やや多～多	
いちご育苗床	うどんこ病 炭疽病	並 並～やや多	
夏秋きゅうり	ミナミキイロアザミウマ	並～やや多	
夏秋なす	ミナミキイロアザミウマ	並～やや多	
夏秋トマト	オンシツコナジラミ タバココナジラミ	並 並	
野菜全般	アブラムシ類 ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ オオタバコガ	並～やや多 並 並 並	
アブラナ科野菜全般	コナガ	やや少	

2 気象予報(高松地方气象台)

1か月予報 5月28日発表（5月30日～6月29日）

〈 1か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低10並20高 70% 高い見込み	少20並 40 多 40% 平年並か多い見込み	少30並 40 多30% ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
- ・期間のはじめに台風第6号や湿った空気の影響を受けるため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

3 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病 (葉いもち)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 早期水稲の定点調査では、発生は認めていない。

(イ) BLASTAMによる葉いもち感染好適条件が、5/21～22に複数の地点で認められ、準感染好適条件が5/1に複数の地点で認められている(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(ウ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 育苗時の多湿は、苗いもちの発病を助長させるので育苗管理に注意する。また、本田に発病苗を持ち込まないように早期発見に努め、育苗中に発病が認められる場合には、薬剤散布する。

(イ) 本田の窒素質肥料の過用は、発病を助長するので、適正施肥に努める。

(ウ) 本田の置苗は葉いもちの発生源となるので、補植後は水田内に放置しない。

(エ) 常発地や罹病性品種を栽培する場合は、本病に適用のある育苗箱施用剤を処理する。

(オ) 本田移植後に葉いもちが認められた場合には、薬剤散布する。

(2) ウンカ類

ア 予報の内容 今後の飛来に注意

イ 予報の根拠

(ア) 現在、予察灯でセジロウンカ、トビイロウンカの誘殺は確認されていない。

(イ) 本田の払落し調査では、ウンカ類の発生は認めていない。

ウ 防除上の注意

(ア) ヒメトビウンカは畦畔・休閑田の雑草地に生息するので、田植えまでに除草を行う。

(イ) 移植時の育苗箱施用剤を処理する。

(ウ) セジロウンカ、トビイロウンカは、梅雨前線に沿って飛来するので、気象予報に留意する。

(3) イネミズゾウムシ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 早期水稲の定点調査では、発生が多い圃場が1圃場認められる。

(イ) 予察灯における成虫誘殺数は、5月第4半旬に1地点で確認(5頭：平年8.9頭)されている。

(ウ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 常発地で今後田植えする地域では、本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理する。

(イ) 成虫の水田への侵入を防止するため、水田の畦畔際に障壁(あぜなみシート等)を設置する。

(ウ) 本虫に有効な育苗箱施用剤を処理していない圃場で発生量が多い場合には、本田防除を行う。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 2月に行った越冬病斑量調査の結果、伊予柑では発生園地率・発病度は少、甘平では発生園地率は平年並、発病度はやや少の発生であった。

(イ) 5月中旬の定点の新葉調査では、発病葉率、発病度ともにやや多の発生である。

(ウ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地の病原菌密度を下げるため、発病枝葉を除去する。

(イ) 強風により付傷すると感染が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 幼果の感染防止のため薬剤防除を行う。

(エ) ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので、本虫を対象とした防除を行う。

(オ) 本病に対して感受性の高い品種(甘平、愛媛果試第48号等)では、防除を行う。

- (2) そうか病
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) 常発地における3月の越冬病斑量調査の結果では、発生程度の高い園地が見られたものの、発病葉率、発病度ともに概ね平年並の発生であった。
- (イ) 5月中旬の定点の新葉調査では、発病葉率はやや多、発病度は多の発生である。
- (ウ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 園地の病原菌密度を下げるため、発病枝葉を除去する。
- (イ) 常発地では発病に注意し、梅雨期間中も発生は拡大するので防除を行う。
- (ウ) 発病葉の多い園地では、6月中～下旬に追加防除を行う。
- (3) 黒点病
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 枯死枝の除去を行う(園内に放置している剪定枝も含む)。
- (イ) 開花後から定期的な防除を行うが、累積降水量や散布後日数に応じて次回防除を実施する。マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は累積降水量が200～250mm(または散布後30日)とし、本病に対して感受性の高い品種(河内晩柑、せとか、清見等)では散布間隔を短くする。
- (4) ミカンハダニ
- ア 予報の内容 発生量：並
- イ 予報の根拠
- (ア) 5月中旬の定点調査では、寄生葉率、1葉当たり雌成虫数ともに並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 園内の早期発生樹で、1葉当たりの雌成虫数が平均2～3頭に達した場合には防除する。
- (イ) 薬剤は掛けむらのないよう散布する。
- (5) ヤノネカイガラムシ
- ア 予報の内容 発生時期：平年並
発生量：並
- イ 予報の根拠
- (ア) 5月中旬の定点調査では、1圃場で寄生を確認している。
- (イ) 本虫が発生している園地における第1世代幼虫の初発時期は、中予ではやや早い、南予では並～やや遅い(病害虫防除所ホームページ参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 防除時期は幼虫初発の30～35日後であるが、アプロード剤、モベントフロアブルは20～25日後であるため、初発時期を勘案して薬剤を選択する。
- (イ) アプロード剤の感受性低下が疑われる園地では、他系統の薬剤を使用する。

か き

- (1) 炭疽病
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 3月の越冬病斑量調査の結果では、発生園地率、発生枝率ともに平年並の発生であった。
- (イ) 5月中旬の定点調査では、新梢での発生を認めていない。
- (ウ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生に助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 発病には品種間差が大きく、横野、富有は罹病しやすい。
- (イ) 発病枝が感染源となるため園地内をこまめに観察し、早期に除去する。
- (ウ) 梅雨期は感染しやすいため、徒長枝等での発病に注意し薬剤防除を行う。

- (2) うどんこ病
 ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 イ 予報の根拠
 (ア) 5月中旬の定点調査では、やや多の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 葉裏まで薬剤がかかるよう散布する。
- (3) フジコナカイガラムシ
 ア 予報の内容 発生量：並
 イ 予報の根拠
 (ア) 5月中旬の定点調査では、寄生を認めていない。
 (イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 幼虫の発育が比較的揃いやすい第1世代幼虫期（6月中旬）の防除を重点に行う。
 (イ) 多発園地では、1回目の防除3週間後に2回目を行う。
 (ウ) 果樹カメムシ類の防除を行った園地では、発生が増加することがあるので注意する。

キウイフルーツ

- (1) かいよう病
 ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 イ 予報の根拠
 (ア) 5月中旬の定点調査では、葉の発病葉率、発病度ともに平年並となっている。
 (イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 園地見回りによって、枝枯れの発生や枝幹部からの樹液漏出痕が確認された場合、周辺への拡散防止のため、発病部位の早期除去を行う。
 (イ) 伐採は、「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき、発病程度に応じて適切に対応する。
 (ウ) 梅雨明けまでは定期防除を行う。
 (エ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは、樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤で防除を行う。なお、収穫時期の早い赤系品種等では、薬剤の使用時期に留意する。

果樹共通

- (1) 果樹カメムシ類（もも、すもも、キウイフルーツ、なし、かき、かんきつ等）
(令和8年5月15日付け令和8年度病害虫発生予察注意報（第2号）参照)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 イ 予報の根拠
 (ア) 県下54か所で行った広葉樹落葉中のチャバネアオカメムシの越冬密度調査では、越冬は越冬が確認された地点率は37.0%（平年30.3%）、1地点当たり越冬虫数は1.26頭（平年0.96頭）で平年並の越冬状況であったが、地域別では差が見られ、越冬量の多い地域もある。
 (イ) 集合フェロモントラップで5か所中3か所、予察灯9か所中5か所の誘殺数が平年より多くなっている（病害虫防除所ホームページ参照）。
 (ウ) 気象予報では、気温は平年より高いとされており、例年より早く越冬成虫（7月頃まで生存）の飛来が増加すると予想される。
 ウ 防除上の注意
 (ア) もも、なし等の有袋栽培では早めに袋掛けを行う。
 (イ) 飛来時期、飛来量は地域、園地により異なるため、早期発見に努める。
 (ウ) 山林から果樹園に飛来するため、山林に近い園地での被害が多い傾向にある。
 (エ) 園地への飛来は、曇天で夜温があまり下がらない日の日没30分後～3時間後に多くなるので、防除はそれが想定される日の夕方が効果的である。
 (オ) 飛来した成虫は集合フェロモンを放出し、同種の成虫を引き寄せるため、飛来初期の防除が重要である。
 (カ) 飛来が続く場合は継続的な防除が必要であるが、ミカンハダニとカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス現象）が起こる可能性があるため、散布後の発生には注意する。

野菜

(1) うどんこ病 (いちご育苗床)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 5月の本圃における定点調査では、発病株率はやや少、発病果率は平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉の過繁茂は発病を助長し、薬剤の付着が悪くなるため、下葉は適宜除去する。

(イ) 葉裏を十分に観察し、発病初期の防除を行う。薬剤散布は、薬液がランナーの先端部や葉裏までかかるよう行う。

(ウ) 発病によって葉が巻き上がるまで放置しないように注意する。

(2) 炭疽病 (いちご育苗床)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 県内では罹病性品種が多く栽培されている。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 萎凋の見られる親株は直ちに除去するとともに、ランナー、小葉に病斑がみられる場合でも株ごと廃棄し、伝染源を減らす。

(イ) 育苗時の主な発病時期は8～9月であるが、ランナー発生時期から定期防除を実施し、親株から子苗への感染防止(予防)に努める。

(ウ) 県内においては、雑草に無病徴感染する炭疽病菌の発病への影響は小さいと考えられるため、雑草対策は現行どおりでよい。

(3) ミナミキイロアザミウマ (夏秋きゅうり、夏秋なす)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 冬春きゅうりにおけるミナミキイロアザミウマの発生は促成栽培で多、半促成栽培では発生を確認していない。今後、収穫終了に伴う施設からの飛び出しは、平年並～やや多いと予想される。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 定植時に粒剤等を処理する。

(イ) 薬液が葉裏までかかるよう薬剤散布する。

(ウ) 卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(エ) 雑草等でも増殖するので圃場内外の除草を行う。

(オ) 夏秋きゅうりでは、本虫はメロン黄化えそウイルス(MYSV)を媒介するので注意する。

(4) コナジラミ類 (夏秋トマト)

ア 予報の内容 発生量：オンシツコナジラミ 並

発生量：タバココナジラミ 並

イ 予報の根拠

(ア) 冬春トマトの5月中旬の定点調査では、タバココナジラミの寄生株率は並、オンシツコナジラミは発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 薬液が葉裏までかかるよう散布する。

(イ) トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)はタバココナジラミが、トマト退緑ウイルス(ToCV)はタバココナジラミ、オンシツコナジラミが媒介するので注意する。

(ウ) 多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。

(5) アブラムシ類 (野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は2地点では平年より少なく、1地点では5月4半旬に急増し、平年より多くなっている(病害虫防除所ホームページ参照)。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉裏などをよく観察して早期発見に努め、寄生が見られたら早めに防除する。

(イ) アブラムシ類は、多くのウイルスを媒介するので注意する。

(ウ) 定植時に粒剤等を処理する。

(6) ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ (野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：ハスモンヨトウ 並
発生量：シロイチモジヨトウ 並
発生量：オオタバコガ 並

イ 予報の根拠

(ア) 性フェロモントラップの誘殺数は、ハスモンヨトウは2地点で平年より多いものの概ね平年並、シロイチモジヨトウは1地点で平年より多いものの概ね平年並、オオタバコガは1地点でやや多いものの概ね平年並となっている (病害虫防除所ホームページ参照)。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 多くの農作物を加害する。

(イ) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を心掛ける。

(7) コナガ (アブラナ科野菜)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 予察灯の1カ所で平年より多く、3カ所では平年より少ない。フェロモントラップにおける誘殺数は、2カ所とも平年より少ない。(病害虫防除所ホームページ参照)。

(イ) 気象予報では、気温は平年より高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

(イ) 収穫残渣を早期に処分し、次世代の発生源を放置しない。

(ウ) ジアミド系殺虫剤 (IRAC コード 28) の一部では効果低下事例が県下で確認されていることから、これらの薬剤の使用は控える。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。

◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。